三浦哲郎

ふるさと紀行

ふるさと紀行

三浦哲郎

毎日新聞社

ふるさと紀行

昭和五十一年四月十日　印刷
昭和五十一年四月三十日　発行

著者　三浦哲郎
編集人　桑原隆次郎
発行人　伊奈一男
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町

印刷　精文堂
製本　大口製本

© Tetsuo Miura 1976

ふるさと紀行　目次

備前秋色　7
詩人と昔話の町　23
草津湯もみ唄　41
信州冬土産　59
能登の太鼓　77
四国路の春　93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

南紀逍遙　109
南国有情　127
石見の湯の里　143
安良里ぶらり　159
灯の海・海底の道　175
雨の渡海船　191

装幀　丹阿弥丹波子
写真　二村次郎

ふるさと紀行

備
前
秋
色

毎年、十月の半ばになると、出版社勤めをしている友人のI君が、姿のいい松茸をどっさり届けてくれる。I君の郷里の備前の山でとれた松茸である。ところが、この秋は、珍しく手ぶらでやってきて、どうも今年の松茸は不作らしいとI君はいった。

今年の夏から初秋にかけて、岡山県の空模様は例年になく平穏であった。長雨もなく、台風の影響もすくなかった。おかげで米は豊作だが、松茸の出来は甚だ悪い。統計的にみて、台風のこない年は、どういうものか松茸の出来がよくないそうである。夏から初秋にかけてが松茸の菌の繁殖期だが、この時期に台風がくると、雨は菌の繁殖に必要な水分をたっぷり与えてくれるし、風は松の幹ばかりではなく、根の方までゆさぶって菌の繁殖に刺戟を与えてくれるから、足の踏み場もないほどの豊作になる。村の人たちはそういっている。

ところが、今年の夏は台風が一つもこなかった。秋になってからも雨がすくなくて、予想以上の不作になってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

けれども、不作だからといって、松茸が一本も生えないというわけではない。家で焼いて酒の肴にしたり、スキヤキに入れて食べたりするくらいは、いつでもとれる。

そんな話をI君はして、

「どうです、今年は僕が案内しますから、むこうへ出掛けて山を歩いてみませんか。」

といった。

私は、子供のころから茸を探して山を歩くのは好きだったが、松茸狩りというのはまだいちどもしたことがない。私の郷里は本州の北のはずれの方だが、近くの山には赤松や栂の深い林がないから、松茸はほとんど生えない。それで、姿のいい松茸をみるたびに、こんなのが山に生えているのをみつけたときの気持はどんなだろうと思っていた。いちどそんな気持を味わってみたいものだと、前にI君にも話したことがあった。

I君は、仕事を整理すれば三日ぐらい休みがとれるという。それでは、二泊三日の予定で松茸狩りの旅をしよう。不作の年に、三日はたっぷりすぎるから、なかの一日は備前焼の窯元を訪ねてみたい。ついでに、岡山藩の藩校だった閑谷学校もみてきたい。近くの村で秋祭りでもしていたら、宵宮の境内でちょっと遊んでくるのも悪くない。そんな心づもりで、私はI君と一緒に備前へ出掛けることにした。

Ｉ君の郷里の村は岡山県の和気郡にある。新幹線で相生までいって、そこからタクシーに乗れば小一時間で着くという。私たちは、午後の〈ひかり〉で出発した。

「僕の村の名前はちょっと風変りでしてね。」

Ｉ君はいつかそういって、手のひらに指で働という字を書いてみせたことがある。村の名前はこれ一字だが、ちょっと変った読み方をする。なんと読むか。読めたら大したものだが、おそらく誰も読めないだろうとＩ君はいった。

労働のドウだが、勿論そうは読まない。ハタラキでもないという。それならカセギと読むのではないかと私がいうと、Ｉ君は目をまるくして、「こいつは驚いた。どうしてわかったんですか。」といった。

それは、私の郷里でも、働くことをカセグといっているからである。近頃は、カセグといえばすぐ収入と結びつけて考えがちだが、私の郷里でカセグといえば、収入とは無関係にただ黙々と働くことである。カセグは稼ぐで、働という字は使わないが、私は子供のころからカセグといえば精を出して働くことだと憶えていたから、働をカセギと読むぐらいは割とたやすいことだったのだ。

「なるほど……それにしても驚きました。」

「私が田舎者だから、わかったのです。」

「でも、自分の田舎言葉が、まさか北のはずれの人にすんなり通じるとは思わなかった。」

I君はそういって驚いていたが、働くことをカセグというのはべつに備前の方言ではない。稼ぐという言葉の本来の意味は、「セッセと働く」ことなのである。それが、北も南もなくお互いの田舎に、いまでも本来の意味を保ちながら細々と生き残っているということだろう。

これはなにも言葉だけに限ったことではなくて、忘れられたような人里には、いまでも時流に耐えて昔ながらの質朴な味わいを保ちつづけているものがいろいろとあるはずだが、それを足の向くままに探してみることも、この連載紀行の目的の一つである。

よく晴れた穏やかな日で、相生からタクシーで働(かせぎ)に向う途中、行手に沈みはじめた日が眩しかった。運転手に訊くと、このところ好天つづきで雨はさっぱり降らないという。旅行に好天はありがたいが、松茸には一と雨ほしいところだ。

「今夜のうちに一と雨くれば、あさってあたりはちょっと期待出来るんですがね。」

I君はそういったが、とても今夜は降りそうもない。運転手に松茸の噂を尋ねると、やはり今年は不作だという返事であった。この運転手にはタケ山を持っている知合いがいて

（タケ山というのは松茸の生える山のことだろう）、毎年今時分になると非番の日に山のパトロールを頼まれる。松茸泥棒を警戒するパトロールである。松茸泥棒は大概、夜、車やオートバイでやってくるから、まず乗物をみつけて、張込みをする。ところが、今年はまだいちどもパトロールを頼まれない。松茸泥棒を捕まえたという話も聞かない。運転手はそんな話をした。

私は、何年か前に知合いの絵描きさんに誘われて、生まれて初めて山女魚（やまべ）を釣りに秋川の奥へいったときのことを思い出した。私たちは勇んで出掛けたが、山女魚は一匹も釣れなくて、辛うじて鉤に引っかかってきた鮠（はや）の子供をハンカチに包んで帰ることになった。「まあ、しかし」と、そのとき絵描きさんは私を慰めるようにいった。「風景をみにきたと思えばいいじゃないですか。いい空気を吸って、いい風景をみて帰る。それだけでもここまできた甲斐があったじゃないですか。」

魚釣りでも茸狩りでも、川や山へ出掛けること自体が肝腎で、獲物は二の次ぎに考えるといい。獲物本位に考えると、獲物がなければ骨折り損だったとがっかりすることになる。今度だって、たまには早起きして秋の山を愉しみにいくのだと思えばいい。私は自分にそういい聞かせた。

働に着いたときはもう日が落ちていた。車が走り去ると、道端の小川の水音がきこえた。三方を山に囲まれた戸数六十のちいさな村である。茅葺きの屋根をトタンで包んだおなじような造りの農家が、車が一台やっと通れるくらいの道の両側にたっぷり間隔を置いて並んでいる。

私たちが路地を歩いていくと、聞き馴れない靴音を怪しんだのか、生垣のむこうで犬が激しく吠え立てた。すると、それに応えるようにあちこちで何匹も吠え出した。犬の沢山いる村である。犬の吠える声ばかりがして、人の姿はどこにもみえない。

I君の生家にも、家族の人は誰もいなくて、長髪といい髭といい五味康祐氏によく似た風貌の左官屋がひとり、鶏頭の花のなかに脚立を置いて黙々と壁を塗っていた。

「早目に西の山へ出掛けて、まだ帰らないのかな?」

I君はそんな独り言をいった。

西の山の中腹には、このあたりの鎮守の社があって、きょうと明日が祭礼である。私は子供のころから鎮守様の祭礼が好きで、とりわけ宵宮に下駄を鳴らして高い石段を登ったりするのが好きで、I君から村の祭礼の日を訊いて宵宮に間に合うようにやってきたのである。私たちは、縁側に荷物を置いて村の裏道をぶらぶらした。

「変だな。どこにも幟がみえない。」

I君があたりの空を見廻していった。祭礼の日にはいつも幟が立つという広場へいってみたが、そこには夕闇のなかに火の見櫓が立っているきりであった。おかしい。

I君は、そばの小川で野菜を洗っている女の人に声をかけて、今夜は宵宮ではなかったかといった。すると、その女の人は祭礼ならもう済んでしまったといった。本来なら祭礼はきょうと明日だが、近頃はウイークデーに当ると人出がないから、何日か繰り上げてこの前の土曜日と日曜日に済ませてしまったのだという。

私たちは拍子抜けして、火の見櫓の下に腰を下ろした。残念だったが、もう済んでしまったものは仕方がない。しばらくすると、I君の家で入札したという村の東のタケ山の上に、半月が昇った。

その晩はI君のところに泊めて貰って、翌朝、私たちはタケ山ではなくて備前市へいった。備前焼の藤原啓さんを訪問するためである。こちらへ出掛けてくる前に、備前焼の窯元を訪ねてみたいという私の心づもりがI君から郷里の家に伝わっていて、I君のお父さんが手廻しよく、まず藤原啓さんを訪問するということに手筈を整えて置いてくれたので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c